

ジュネーヴ州の公立小学校における音楽教育

今 由佳里〔鹿児島大学教育学部(音楽科教育)〕・長谷川 理子〔La Maison Bleu- École Montessori〕

L'Enseignement de la Musique à l'École Primaire Genevoise

KON Yukari・HASEGAWA Satoko

キーワード：学校音楽教育、小学校、リトミック、スイス、フランス語圏

はじめに

スイスの公立小学校では、日本のように全国を統一した学習指導要領を持たず、各州が独自の教育計画を打ち出している。教育は州の責任と考えられているため、学校教育の制度や内容が変更される場合は必ず住民投票を行い、民意を反映した決定を行っている。このような現状から、学校教育に対する住民の関心は非常に高いことがわかる。

スイス・フランス語圏の州都であるジュネーヴは、リトミック教育を行ったジャック・ダルクロゼ (Émile Jaques-Dalcroze, 1865 - 1950) が教鞭をとった地である。今日世界で広く親しまれているリトミック教育の創始者であるダルクロゼは、ジュネーヴで独自の教育メソッドを確立させた。彼の音楽教育思想は、プライベートな音楽教育機関だけではなくジュネーヴ州の学校音楽教育にも大きな影響を与えており、音楽科の授業ではリトミックが教育の主要な内容として含まれている。つまり、ジュネーヴ州ではリトミックを重要な教育内容として位置づけ、独自の音楽教育を展開しているのである。ジュネーヴ州の多くの小学校では4年生まではリトミックを主流とした音楽科授業を展開しており、身体の動きを取り入れた音楽教育を積極的に公立学校において実践している。音楽専科教員と同様にリトミック専科教員が常勤し、州の公教育課には「音楽・リトミック科」というセクションが置かれていることから、ジュネーヴ州におけるリトミック教育の普遍性が理解できるであろう。

本稿では、スイス・ジュネーヴ州のプチ・フォンテーヌ小学校 (L'École des Petites Fontaines) を取り上げ、スイス・フランス語圏の小学校における音楽教育の実態について明らかにしていきたい。

1. プチ・フォンテーヌ小学校の概要

本稿において対象とするプチ・フォンテーヌ小学校は、ジュネーヴ市郊外に位置する公立小学校である。他のジュネーヴ市の公立小学校と同様に幼稚園が併設されており、幼小一貫した教育がなされている。4歳から12歳までのあわせて26クラスを有している。ジャック・ダルクロゼ研究所 (Institut Jaques-Dalcroze) からのリトミック教員養成のための研修生も例年受け入れており、リトミック教育に力を入れている学校のひとつといえるだろう。



写真1：プチ・フォンテーヌ小学校外観¹⁾

写真2は、ジュネーヴ州のホームページに掲載されているリトミックルームの一例である。小学校でリトミックを行う教室として紹介されている。ジュネーヴの場合、州立の小学校にはこのような整ったリトミックルームが設置されている場合が多い。ジュネーヴの公立小学校では、学年にもよるがリトミックが週一時間程度授業に組み込まれている。そのため、リトミックの設備もそれぞれの学校において非常に整っていることが特徴である。

写真2：リトミックルーム²⁾

プチ・フォンテーヌ小学校には、リトミックのための“Salle de la Rythmique”あるいは“Salle Gymnastique”と呼ばれる専用の教室がある。これらの教室は、写真2と同様に壁の一方を全面ガラス張りにし彩光を計画的に行っているため、非常に明るい雰囲気になっている。また、道具類はすべて壁に設置された棚の中に収納しているため、扉を開けなければ中は見えないように工夫されている。教室内は非常にシンプルであり、子どもたちが授業に集中しやすい環境を意識的につくっているのである。後述するが、道具や楽器類についても非常に充実した環境にある。リトミックの授業では、ボールやフラフープ、ロープ、布、スティックなどの小道具類を頻繁に使用するが、打楽器とともに全員分とはいえないが充分な種類、数量が確保されている。なお、プチ・フォ

ンテーヌ小学校のリトミックルームには椅子も置かれておらず、活動を十分に行えるスペースが確保されている。

子どもたちはクラス担任の引導によって教室を移動する。クラス担任はリトミックの授業は行わずリトミック専科教員が授業を行うが、授業には参観している。場合によっては、リトミック専科教員のアシスタント的役割を担って、子どもたちの教育的対処を行うこともある。

2. リトミックの授業実践

本項では、プチ・フォンテーヌ小学校4年生で実施されたリトミック専科教員イザベル・フォッシュェ (Isabelle Fauchez) 教諭の2つの授業について述べていく。

(1) 実践例1：「拍」の学習

① 概要

学習内容：「拍」について

実施日時：2009年2月20日

学 年：4年生 (9～10歳)、23名

担当教師：Isabelle Fauchez

実施時間：1時間 (45分)

②授業の流れ

「拍」の学習に関する授業の流れを、以下表1に簡単にまとめる。

表1：実践例1の授業内容

授 業 記 録	
1	子どもたちは、自由に部屋の中を歩いている。その歩みの途中で教師は数を言う。子どもたちはその数を聞いて、手でその数の手拍子を打つ。この時手で打つ拍の速さは、ほとんどの場合自然に自分の歩いているテンポになる児童が多い。
2	円になって床に座る。1と同様に、教師が数を言い、今度はそれを身体のあるあらゆる部分で打つ。頭であったり膝であったり、なかには独創的な姿勢、例えば膝と肘を打合せたりするといったような体勢を見つけだす児童もいる。そのことを教師が指摘すると、他の児童もさらに面白そうなポーズを様々に工夫する。同じテンポで全員が活動を行う。
3	音楽に合わせて4拍歩き、4拍止まる。この時、前後左右、どこに移動してもよい。
4	子どもたちは、4拍ずつ違う身体表現をする。最初の4拍は、自由に動く。次に好きなポーズで止まり、4つ数をかぞえる。さらに4拍手をうち、4拍分歩く。
5	授業のまとめとして、CDの曲に合わせて二人組の活動を行う。子どもたちは、4拍ずつ交互に身体表現を行う。

「拍」という概念は、音楽において拍子やリズムの基礎になるものである。しかし、この活動を見ると、音楽的要素を学習しているというよりはむしろ身体を動かすことに主眼が置かれていることに気づかされる。上記した5つの活動には、異なった目的を有しつつ段階を踏んで学習が行われるよう配慮がなされており、それぞれに多くの身体表現が組み込まれている。すなわち、身体に元来備わっている生命のリズムを利用して、音楽を体験することを同時に行っているのである。また、これらの活動はスペースを効果的に使い、様々な可能性を試せるように工夫されている。このスペースに関する工夫はこの実践に限ったものではなく、リトミックの授業の根底にその意識が大きくある。

実践の中で特記すべきことは、それぞれの活動において教師が一人ひとりの児童に対する声掛けを頻繁に行っているという点である。他の児童の真似をしたり、「アイディアがある人は手を挙げて」というような問いかけは授業中頻繁に行われ、また子どもたちはそれに答えるように積極的に挙手をして発言している。他の児童やグループの表現を見るという場面も多く取り入れられ、

「○○さんのようにやってみよう」という活動は授業中必ず行われていた。これらの活動は、2人組や3人組といったグループでの活動に組み変えることが容易であるため、協調性やコミュニケーション能力を養うという点においても非常に有効である。また「歩く」活動の場合、楽器や特別な用具も必要ではないため、音楽室の環境が整っていない学校においても対処できるということも大きな利点の一つである。

(2) 実践例2：音のイメージを表現する学習－シフォンの布を使ったリトミック

① 概要

学習内容：音のイメージを表現する学習

実施日時：2009年3月6日

学 年：4年生（9～10歳）、23名

担当教師：Isabelle Fauchez

実施時間：1時間（45分）

②授業の流れ

音のイメージを表現する学習に関する授業の流れを、以下表2に簡単にまとめる。

表2：実践例2の授業内容

授 業 記 録	
1	50cm×50cm程度の薄いシフォンの布を準備する。シフォンの布の四隅を縛り、人形のような形をつくる。教師がその布人形で作った姿勢を真似る。例えば真ん中をつまんだ形を提示すると児童は爪先立ちになる、布を床に置いたら児童も床に寝転がる、というような具合である。中にはどのようにしたら近づけるかと、無意識のうちに非常に独創的な姿勢をとって注目を浴びる児童もいる。この活動は柔軟性を必要とするとともに、観察力や想像力も必要としている。最初は立つ、横になる、手を挙げるなど容易につくれるポーズから始め、次第に複雑にしていく。授業開始時の子どもたちの緊張を和らげたり、気持ちをほぐしたりする目的もある。
2	一人一枚ずつ布を持たせる。布を持って音楽にあわせて歩く。ドミソド、のような上行形の短い音列の合図が聞こえたら、その布を上にも動かす。逆に下行する場合はどのように動かせばよいかを子どもたちへ質問し、音の合図を聴き分けて布を動かすよう指示する。子どもたちが慣れてきたら、段階的に複雑な音列を示し、音がどのように動いたかを布で再現する。この活動では、メロディーやフレーズといった音楽的な内容を身体表現を通して体験している。
3	布を頭上高くに放り投げて、落ちる様子を観察する。薄くて軽いシフォンの布は落ちるまでに時間がかかる。その動きに声で即興のフレーズをつける。メロディーではなくともよい。
4	布に下から息を吹きかけて、布の動きを観察する。息の音そのものを音楽として捉える活動である。歌や楽器を演奏する際に必要な肺活量のトレーニングにもなっている。
5	布を使ってイメージするものは何かを質問し、教師の即興のピアノに合わせて身体表現をする。子どもたちからは花嫁、魔女、バットマンなどの意見が積極的にだされる。児童は非常に楽しそうに活動している。

本授業は、小道具を用いた授業の一例である。リトミックの授業では楽器以外の道具を利用した活動が多く、教室には多くの小道具が収納されている。この授業で用いられたシフォンの布は、やわらかく美しい動きを描きだすため、子どもたちに好まれる道具のひとつである。シフォンの布でメロディーラインを描くことによって、音楽の流れが具体化され、視覚的にも有効な学習といえる。

小道具の使い方は、道具によって非常に多くの可能性が見出される。本授業で用いた布ひとつとっても色や布質、長さによってその動きや印象は変化する。プチ・フォンテーヌ小学校においては、布は数色用意されており美術的な意図から選択されている。子どもたちは布を使った活動を好み、教師が布を見せると目を輝かせて活動を心待ちにしている。シフォンのような柔らかい布は動きがしなやかなため、自然と子どもたちの動きにも柔軟性を加えることができるとともに、個人でも少人数のグループでも活動が行えるため、有効な道具のひとつといえるであろう。全員で様々な色合いのシフォンの布を音楽にあわせて揺らした光景は、視覚的にも色鮮やかで美しい時間をつくりだしている。本稿においてはプチ・フォンテーヌ小学校における実践のみを紹介しているが、プライベートのリトミックレッスンにおいても、通常布を始めとする小道具は頻繁に用いられている。

リトミックの授業では、それぞれの道具の性質や有効性を意識して利用することによって、子どもたちへ音楽の理解を促している。また、授業では楽器のみならず、効果的な声や身体音などの噪音を取り入れることで、子どもたちの音楽に対する捉え方を拡大しているのである。

3. 小学校におけるリトミックの役割と目的

日本では、プライベートな音楽教育機関や幼稚園においてリトミックは多く用いられているが、小学校に適用する場合いかなる効果が認められるのであろうか。ジュネーヴの小学校でリトミック専科教員を行っているセシル・ポーリ

ン (Cécile Polin Rogg) は、小学校におけるリトミックの役割と目的について①発見の力をつけること、②音楽と動きの関係を知ること、③記憶力を伸ばすこと、④創造、即興の力をつけること、⑤社会性を養うことという5点を挙げている。以下にその詳細を述べる。

① 発見の力をつけること

一点目は、身体能力の発見に関することが挙げられる。リトミックでは、模倣や動きを取り入れた遊びから身体を通した音楽表現を行っている。これらの活動を行うことによって、子どもたちは身体機能を意識することができるようになる。緊張と緩和やバランス、ニュアンス、身体分離を子どもたちは自らの身体から発見することができるのである。二点目に関しては、空間の発見である。リトミックは身体を動かした音楽表現を行うため、自己のスペース・パターンを認識する機会となる。この空間の認識は、前後左右への意識、幾何 (図形) の意識、エネルギーの関係、さらには内的あるいは外的方向の発見に繋がっている。

② 音楽と動きの関係を知ること

リトミックの特徴のひとつは、音楽と動きの関係である。例えば、足の動きひとつをとっても、歩く、跳ぶ、スキップ、滑る、つま先歩きなど歩みのヴァリエーションは豊富に存在する。この動きに伴って、子どもたちは、体重移動の感覚や音楽の性質の違いによる多様な表現を学ぶことができるのである。また、身体の表現を通して動と静という感覚を効果的に学ぶこともできる。この相反する表現は、強弱や遅速、高低といった違いを知ることにも繋がっている。さらには、リズムやフレーズについても身体の動きと結びつけて理解することが可能なのである。

③ 記憶力をのばすこと

スイス・フランス語圏の音楽教育では、リトミックに限らず音楽を記憶する活動が多い。そのためリトミックにおいても、動きや音などに対する記憶を刺激することを要求している。また身体を通した音楽表現のため、振り付けに関する記憶

力も要している。

④ 創造、即興の力をつけること

日本の音楽教育においては、子どもたちの創造力育成に関する研究は長年の課題となっている。新学習指導要領表現領域「音楽づくり」においては、即興性を身に着けることも強調されており、ジュネーヴ州のこの取り組みは日本の音楽教育界へ示唆を与えることとなるであろう。リトミック教育では声や楽器による音楽の創造のみならず、身体の動きの創造を取り入れている。身体機能に対する創造力と音楽の創造力をあわせて育成しているのである。また、声や楽器に対しての即興は、身体の反応とあわせて学習されている。身体の動きが音楽の創造を促す場合や音楽の創造が身体の創造を助ける働きもあり、両者が相互に刺激して創造性豊かな表現を完成させている。

⑤ 社会性を養うこと

リトミックの活動は、個人やペア、グループ、全員一斉と多様な学習形態をとっている。小学校においては、一対一の学習形態からグループ活動に移行できる成長段階のため、発達段階によって様々な形態の学習を行うことが可能となってくるのである。グループや一斉活動では他人と協力してつくりあげる楽しさや難しさ、喜びを味わうことができる。その過程では、寛容さや忍耐力を子どもたちは身に着けていくことができるであろう。子どもたちはこのような活動を通して自己を知り、自信を持つ機会ともなっている。

上記した5点は、現在の日本の学校音楽教育においても必要とされている能力であろう。身体を通して音楽を感じるということは、音楽だけで学習を進めていくことよりも子どもたちに具体性を持たせることができ、有効な学習法と言えるのではなかろうか。

4. リトミックの効果をいかした授業

本項では、リトミックの音楽的・教育的効果をいかした授業について思考してみたい。

実践例1において、「歩く」という活動を取り

あげた。この活動は、特別な道具や楽器を必要とせず、また音楽を専門に勉強していない教諭にとっても取り組みやすい効果的な学習であるのではなかろうか。今回事例に挙げた実践では、ある一定のテンポにあわせて拍子をとるという目的を持って授業がなされていた。それは、教師がテンポを提示して行う活動であったが、同じクラスの別日の学習では歩くという活動は同一であるがまったく違う目的を持った授業を行っている。すなわち、「歩く」という活動ひとつをとっていても、その目的によって実践は異なってくるのである。ひとつの実践を土台にし、目的別に様々に展開していくことが可能なのである。それでは、リトミックでは「歩く」という動きを通して他にどのような学習の展開が考えられるのであろうか。

* テンポの違いを感じる

- ① 子どもたちは円になって座る。リーダーが代表で、好きな速さで円の外側を歩く。
- ② 座っている子どもたちは、目を閉じてその足音を聴き、歩いている児童の速さに合わせて軽く膝を打つ。
- ③ 次にリーダーを変え、違う速さで歩くように指示を出し、同様の活動を行う。

単純な活動ではあるが、人間の歩くテンポは往々にして規則的となる。それだけで拍子感を感じるには十分な学習となる。また、目を閉じて足音を聴くことによって聴覚を鋭敏にし、集中力を増大させるという効果が挙げられる。これとは逆に歩く児童を観察し、同じテンポで手を打つという活動も考えられるが、この場合聴覚よりも視覚に頼った学習に陥ってしまう危険性がある。歩いている子どもの足音と聴いている児童の膝の音の即興アンサンブルが、この活動から生み出される。リーダー役となる子どもは、自分の足音に全員が耳をそばだててきているという緊張感とは逆に、自分がつくりだす足音にしたがって生み出される手拍子のアンサンブルに誇らしげな気持ちとなる。スベルが正しく書けない、あるいは計算を間違ってしまうという不安を感じることはない。このような活動は、子どもたちに自信を持たせる機会を与え、学校教育において非常に重要なこと

ではなかろうか。

* スペースの違いを認識する

前述しているテンポの違いに関連するが、歩く速さが異なれば歩幅も異なるというスペースの違いが生じる。それは、単純に身長によって生じる差異の場合もあるし、それぞれの歩き方に起因する場合もある。ここでは子どもたちにいろいろな歩幅で歩くことを指示し、様々なスペースの違いを体験する機会をつくる。

- ① 数人の児童を横一列に並べ「4歩歩いて止まる」という指示を与え、好きなように歩かせる。最初は自由に歩かせるが、その際に児童によって歩幅が必ずしも一定ではないということに気付かせる。そしてその歩幅が違うということを利用して、次に「誰が一番遠くまで行けるか」あるいは逆に「遠くへ行かないように歩いて」という声掛けをし、あらゆる歩幅を体験させつつ自由な想像力を養う。
- ② 進んだ距離を見比べて、気がついたことを話し合う。

スペースを意識した活動の利点は、子どもたちの身体機能を十分に伸長させる可能性があるということである。この場合、同じ速さになることを求めてはいないので、児童はさらに自由に身体を動かすことが可能となる。

* 方向の違いの効果

音楽の方向性と身体の動きの方向には密接な繋がりがあがる。例えばダンスを踊るとき、音楽の方向性が変化するのに伴って、ダンスの進行する方向を変えることがある。このような変化は、踊ることに楽しさをさらにつけ加える効果があり、小学生には有効な方法ではなかろうか。

- ① 部屋の中で自分の好きな位置を選んで移動し、顔の向きをそれぞればらばらにして立つ。
- ② 音楽にあわせて一人ずつ、クラスメイトの間を通り抜けるようにして歩き、一定のフレーズで交代する。歩き終えた児童から座っていく。
- ③ クラス全員でダンスを行う。円になって手

をつなぎ、右に左に、前後にと楽曲のフレーズにあわせて方向を変える。難易度をあげるためにフレーズの長さを変化したり、あるいは方向を複雑にするなどの工夫を加える。使用する音楽によっては、楽しくも美しくなるフォーメーションを見ることができる。

- ④ 音楽にあわせて自由に歩く。フレーズの変わり目や休符を合図として、方向を変えて歩み続ける。活動中は、他の子どもにぶつからないようにするため、集中力が必要となる。人数が多い場合はグループに分け、片方のグループが歩いている時はもう一方のグループはその歩みを観察するという方法をとると、自己と他者の表現の違いや共通性に気づける学習に発展することができる。

* ニュアンスの違いを感知する

音楽表現において、ニュアンスの変化は必要不可欠な要素である。表現者によっていかようにも発展させられる課題ではあるが、目的の持ち方によって実践の方法は様々に異なってくる。

- ① 音楽にあわせて歩く。最初は、「歩く」そして「止まる」という基本的な歩みから始める。この活動は、音楽を聴いていないとその指示が認識されないため、自然に音楽を集中して聴く状況がつくられる。次はテンポを変える、あるいは強弱を変える活動に進める。このようにキャラクターを変えて取り組むことによって、歩みの可能性も拡がり同時に想像力を養うことにも繋がる。ゲーム性に富んでいる活動なので、子どもたちはすぐに活動に入りこめ、また緊張をほぐすこともできる。あらゆるキャラクターの音楽を提示して体験することによって、自然にニュアンスの違いを感知できるようになっていく。
- ② ①のような活動は、ニュアンスの違いを自然に体験できるが、今度は『〇〇のように歩く』という指示をだして、児童に歩かせる。その歩みにあわせて、指導者は伴奏をつける。
- ③ 歩き方にも様々なヴァリエーションがあることを子どもたちへ示し、さらに新たなアイ

ディアが生み出せるよう子どもたちの想像力を刺激する。ニュアンスの課題は、児童の語彙を豊かにすることや、感情表現を刺激することにつながり、非常に有効な学習方法である。

本項ではテンポの違い、スペースの違い、方向性の違い、ニュアンスの違いという4点に関して、いくつか活動内容を提案した。これらは全て楽器や特別な用具を必要とせず、また特別な音楽的技能を要するものではないため、子どもたちと直ぐに取り組みめる内容である。

5. リトミックの授業における現状

ジュネーヴでは、公教育以外にもリトミックのレッスンを受けられるプライベートな音楽教育機関が数多く存在している。したがって、普段通っている小学校で受けるリトミックの授業とあわせてプライベートなリトミック教室でレッスンを受ける子どもたちの割合は、ほかの地域と比べて一般的に高い傾向がみられる。これら2つの教育機関の最大の違いは、レッスンの中にソルフェージュの要素や楽語に関する説明があるかないかであろう。小学校のリトミックの授業は日本でいう音楽科の授業にあたるものであるが、ジュネーヴの小学校では授業中に音楽の楽典的なことを教えることがない。すなわち、授業ではドレミや音符の知識について教えることはほとんどないのである。例えば、小学校では頻繁に歌を用いた授業が展開されているが、その楽曲が何拍子であるか、あるいは何調であるかといったことを学習することはない。音楽表現の楽しさを体験し、理論的に吸収できる年齢に到達してから音楽理論に関する学習は始まるのである。それは、子どもの発達段階を鑑みた教育の方法なのである。したがって、リトミック教師は音楽知識の全く無い児童にも活動に取り組みやすいよう内容を工夫している。リトミックの授業に関しては、教師によって成績をつけられることはない。小学校でこれを教えておかなければならないという特別なカリキュラムや教科書もなく、子どもたちの実態に応じてリトミック教師が授業を考案するという教師の采

配に大きく任せられているのが現状である。音楽を感じられる感性、音楽を楽しめる姿勢、何かを想像してつくり出すという創造性を養う教育を目指しているのである。

おわりに

小学校で規律を教えることは、学校教育において重要な課題のひとつである。リトミックを行う大きな目的の一つは、その規律を子どもたちに伝えやすくするという点にあるのではなかろうか。例えば、聴こえてきた音楽にあわせて手を打つという活動を行った場合、日本の児童は拍子にあわせて皆が同じように手を打つことが多いが、ジュネーヴでは日本と同じような結果にはいたらない。全員がでんでばらばらに手を打ち始めるのである。それが拍子とあっている子どもは、音楽を学校外で習っているか、音楽を聴くことに慣れている児童である。しかしこれは、ジュネーヴの子どもたちの音楽的基礎力が不足しているということではなく、音楽を表現するというのが何を指しているのかという問題にある。つまり「音楽にあわせて手を打ちましょう」という指示からの発想が、それぞれの子どもによって個人差が非常に大きいのである。ある子どもはメロディーを表現して手拍子を打つ、またもうひとりの子どもは目立つ楽器の音を聴きわけてそれだけを手拍子で打つという状態になるのである。それではなぜそのような聴取の差異が生まれるのかといえば、彼らの音楽の聴き方が幼いころより非常に自由で、自らの感性に響くものを優先した聴取活動をゆるされてきたという環境にあるのではなかろうか。したがって前述しているような、リトミックの授業において皆で同じテンポで手拍子を打つという活動自体が規律を学ぶというひとつの目的を果たした学習となるのである。日本の現象が統一から展開へという過程を辿るとしたら、欧米では自由から統一へという逆の方向性が考えられるかもしれないが、この違いに当初は非常に驚き、感覚の差というものを痛感した。すなわちジュネーヴの小学校では、リトミックは音楽教育としての機能と同時に社会性を育てるということに重きが置かれているのである。

日本の音楽教育では、西洋音楽と日本古来の伝統音楽との学習バランスをどのように保ち、自国の音楽について如何に教えるべきかという課題が常に横たわっている。しかし西洋の場合、そのような問題が日本に比べて非常に少なく感じる。その理由は、西洋音楽が生まれたという土壌によるものかもしれないし、日本の歴史的な音楽教育政策に由来するものかもしれない。多くの原因が考えられるが、このような文化的・教育的背景の違いも含めて、リトミックが日本の学校音楽教育においてどのような役割を持つことができるか、どのように取り入れていくべきかを考えることが必要となるであろう。音楽の聴き方や楽しみ方は世界共通のものであり、その根底に流れる生理的、運動学的な身体感覚にダルクローズが注目したことによってリトミックが普遍性、適応性をもったメソッドとして世界各国に広がりをもたせたこととなった。このような歴史的意味を踏まえつつ我が国における小学校での展開を今後考えていきたい。

*本研究は、科学研究費補助金 若手研究 (B) 課題番号23730839 (研究代表者：今 由佳里) の助成を受けて行われているものである。

【注】

- 1) <http://www.ge.ch/construction/> (2012年8月20日アクセス)
- 2) <http://www.plan-les-ouates.ch/> (2012年8月20日アクセス)

【参考文献】

- ・ E. Jaques-Dalcroze, *Le rythme la musique et l'éducation*, édition Foetisch, Lausanne, 1920
- ・ Département de l'instruction publique, Direction générale de l'enseignement primaire, *Ecole Primaire*, 2007
- ・ Département Formation et Jeunesse du Canton de Vaud, *LA MUSIQUE A L'ECOLE: Guide méthodologique à l'usage des enseignants des classes enfantines et primaires*, Loisirs et Pédagogie, 1987
- ・ Jaques de Coulon, *Petite philosophie de l'éducation*,

Desclée de Brouwer, Paris, 2007

- ・ Tethuko Kuroyanagi, *TOTTO-CHAN la petite fille à la fenêtre*, éditeur Pocket, 2008
- ・ Université de Genève, *LISTE DES MANUELS SCOLAIRES ET AUTRES MATERIELS DIDACTIQUES*, Bibliothèque FPSE, 2006
- ・ エリザベス・バンドゥレスパー著、石丸由理訳『ダルクローズのリトミック』ドレミ楽譜出版社, 1997